



「第10回小中一貫教育小規模校全国サミット in まつのやま」の様子 解説は8ページ  
 左から オープニング(児童生徒会)、理科公開授業(5年生)、子どもサミット(8・9年生)

## 巻頭言 『探究学習が切り開く子どもの未来』

学校教育課 指導主事 平野 雄介

子どもたちに必要な「学び」の概念は、時代の流れとともに少しずつ変化しています。未来を自分の力で生き抜くために、課題を発見する力、情報収集・分析する力、計画を立てる力、考えたことを表現・発信する力、人とつながる力など、さまざまな力が必要とされています。これらの力を育てるため、今、注目されているのが「探究学習」です。探究学習とは、どのような学習であるかを比較等しながら整理してみます。

探究学習と教科学習の違いは、教科学習は「定まった答えのある課題」に取り組みますが、探究学習は「定まった答えのない課題」に取り組むことです。(表1) また、調べ学習は「調べること」が目的になりますが、探究学習は「問いを立て解決すること」を目的とします。(表2) 小・中学校では主に「総合的な学習の時間」に、高等学校では「総合的な探究の時間」及び各教科のなかにも探究学習が設定されています。(表3)

探究学習	定まった答えのない課題を学習
教科学習	定まった答えのある課題を学習

表1 探究学習と教科学習のちがい

調べ学習	調べることが目的
探究学習	問いを立て解決することが目的

表2 調べ学習と探究学習のちがい

「総合的な学習（探究）の時間」のなかで行なわれる探究学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な学習（探究）の時間で実施。</li> <li>・教科の枠を超えた横断的・総合的な学習。</li> <li>・自分の興味・関心事を出発点とする課題を自ら設定する。</li> </ul>
教科のなかで行なわれる探究学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科の学習の時間で実施。</li> <li>・教科の見方・考え方を組み合わせて課題を解決する。</li> <li>・高等学校の新科目。（古典探究・地理探究・日本史探究・世界史探究・理数探究基礎・理数探究）</li> </ul>

表3 「総合的な学習（探究）の時間」と教科のなかで行なわれる探究

探究学習を通して、以下の「考えるための技法」（表４）養うことは、探究の学びの大きな価値といえます。こうした「考えるための技法」を汎用的なものとして身に付けると、実社会・実生活の課題解決場面において自在に活用できるようになります。探究学習とは、学びに点数がつかない失敗が許される場所で、安心して試行錯誤を繰り返す学びととらえることもできます。当市では、次年度より「総合的な学習（探究）の時間」のなかで、子どもたちの探求する力をさらに育む予定です。

考えるための技法	○順序付ける    ○比較する    ○分類する    ○関連付ける ○多面的に見る・多角的に見る    ○理由づける    ○見通す ○具体化する    ○抽象化する    ○構造化する
----------	--

表４ 探究学習で養われる「考えるための技法」

## 小中一貫教育

### 小学生と中学生が共に学び考える場

２学期後半は、各中学校区でいじめ見逃しゼロスクール集会や小中交流会が行われました。今年度、１１月後半はインフルエンザの流行により参観することができませんでしたが、南中学校区、松代中学校区、川西中学校区の様子について、「いいなあ！」と思ったことをお知らせします。

**南中学校区**では、南中学校の生徒全員と西小学校・川治小学校の５年生が参加して行われました。なぜ６年生ではなく５年生なのかを聞いてみると、６年生は、授業や部活体験、陸上競技合同練習など様々な場面で中学生との交流があるので、５年生から交流をすることにより、中学校を身近に感じてもらうねらいがあるとのことでした。なるほどこういう工夫もあるのか、と納得することができました。最初のアイスブレイキングゲームでは、中学生の方から優しく声をかけてグループに誘う姿や、見ず知らずの私にまで声をかけてグループを作ろうとする態度がほほえましかったです。



各校の発表では、まず西小学校から「ハートぼかぼかカード」や縦割のなかよし班活動など心を通わせる活動についての紹介がありました。マイクなしで体育館中に響く声に感心しました。次に川治小学校からあたたかいメッセージを題材としたＳＳＥ（スクールソーシャルエデュケーション）の劇が発表され、お互いに気持ちよく過ごせるように相手が傷つく言葉を使わないようにしている取組が紹介されました。南中学校からは、生徒会本部を皮切りに各委員会やそれぞれの学年で取り組んでいるいじめを見逃さない取組、絆を深めいじめが起きないようにする取組が紹介されました。感心したことは、それぞれの発表を聞く態度です。背筋を伸ばして集中して話を聞こうとする子どもたちの態度から日頃の学校での生活の様子を垣間見ることができました。

続いて、ネットいじめに関する動画視聴が行われました。サッカーが上手なヒロキがキックを失敗したところを撮影され、ネットにアップされてしまいます。この情報が学校中に拡散し、ヒロキは学校に行かなくなります。これに怒った母親が学校に電話をするという話です。生徒会本部から、このことをどう思うか近くの人と感想を伝え合いま



した。「写真を撮ってネタにするのはよくない」「許可なしに送るのはよくない」「勝手に拡散するのはよくない」といった声が発表されました。

**松代中学校区**では、初めにお笑い集団N A M A R Aの高橋なんぐさんの講演会が行われました。松代小中学校全員、地域の方も一緒に聴き、笑いの中にいじめや人権について考えるヒントがあり、たくさんの学びを得ることができました。

その一つが「見方を変えると見えないものが見えてくる」ことです。車いす生活をする障害のある芸人（障がい者M1 グランプリ初代チャンピオン）にインタビューをした時のことを話されました。なんぐさんは、「一つ願いが叶うなら何を願いますか？」とたずねたそうです。「歩けるようになりたい。」という予想に反して返ってきたのは「彼女が欲しい。」決めつけていた自分が恥ずかしかったとなんぐさんは振り返っていました。最後に「誰にでも失敗はあります。失敗することはちっとも恥ずかしいことじゃありません。失敗から立ち上がろうとしないことが恥ずかしいことじゃないでしょうか。」と語り講演を閉じられました。

講演後、5・6年生と中学生とでグループワークを行いました。5・6人の小中学生混合チームで、自己紹介リレー、クイズならべろ（動物の睡眠時間が長い順、日本人が食べる果物の多い順など）と進み、最後に新聞紙3日分を使って10分間でタワーを作り高さを競う作業を行いました。各チームが知恵と力を結集して夢中になって高いタワーを作ろうとしていました。優勝チームの高さは2 m 80 cmでした。松代中学校の村山校長先生が「こんなに楽しい集会は初めてだ。」とおっしゃるように私も子どもたちが小中の垣根を越えて楽しむ姿をワクワクしながら見ることができました。



**川西中学校区**では、千手小学校、上野小学校、橘小学校の6年生と川西中学校の1年生が、4人グループを作って、数学の問題を解く授業を拝見しました。小学生が中学校の授業体験をすることはよくありますが、小中学生が同じ教室で授業を受ける様子を参観するのは私自身初めてです。



先生は、各グループに2つのサイコロを渡します。それぞれのサイコロの目はAが3面、Bが2面、Cが1面です（1～6の普通のサイコロではありません）。2個同時に転がすと、1番出にくい目の出方を考えるよう指示しました。答えがC・Cであることは容易に考えることができます。「では最も出やすい目の出方は何と何でしょう。グループで話し合ってみましょう。」の問いから話し合いが始まります。A・Aと答える

グループが多かったですが、答えはA・Bです。なぜそうなるのかをグループごとに考え説明できるようになることが学習の中心課題です。サイコロは正6面体ですから、36通りの出方が考えられます。実際に36回転がしてみようとするグループや36通りの出方を書き出すグループなど夢中になって取り組んでいました。時間が経過すると、いくつかのグループが正解を導き出すことができてきました。そこで先生は、席を立って他のグループを見に行ったり、聴いたりする時間を設けました。自分たちが考えた方法と近いグループ同士で説明し合う様子や興味のある方法を見つけて聴き合うグループがあり、とても興味深く参観することができました。学習内容は中学校2年生の3学期

のものだそうです。小学生も算数で「並べ方・組み合わせ方」の学習をしているので、ある程度同じような条件で考え合うことができました。授業を考案し準備をされた先生に敬意を表したいと思います。

続いて、タレントの今井美穂さんが「人生を変えるポジティブシンキングの秘訣」を演題に講演されました。一気に背が伸びたことにコンプレックスを感じた小学生時代から自信をもてないまま過ごした中高生時代、特にやりたいことがないまま就職した会社員時代のことを語られました。20歳で第29代ミス十日町に選ばれて活動する中で「もっと新潟をPRしたい。」と初めてやりたいことを見つけて、勤めていた会社を辞めたことなどの体験から「いつからでも変わることができる。」「コンプレックスに感じていたことも見方を変えれば強みになる。」「自信をもってやりたいことをやるのが大切だ。」と語られました。27歳で大きな病気を経験したこと、30歳で通信大学で社会福祉士の資格をとったことなど変わっていく自分自身を振り返り、「なぜ勉強するの?」と問われたときに「誰かを助ける力になる知識や技能を身に付けられるから。」と生き生きと話す笑顔が印象に残っています。最後に人を惹きつけるポジティブな自分を作り方として、自分の感情に向き合い身近な人に言うこと、誰かのことをほめてあげてことを挙げられました。

その後の部活動体験では、新部長になった2年生を中心に小学生に部活動の楽しさを伝えようとする中学生の姿が頼もしく感じられました。

3中学校区の取組それぞれに小学生が中学校進学に際して直面する壁を乗り越える力をつけていこうとする工夫や意気込みが感じられました。

## ■ 小中一貫教育推進協議会第1回会議から

10月29日(水)に令和7年度小中一貫教育推進協議会、第1回会議を開催しました。人事異動などにより、昨年度から6名の委員が替わりました。拡大中学校区から澤田健太郎教諭(十日町中)、南中学校区から福崎裕一PTA会長(南中)、下条中学校区から小島美和子校長(下条小)、川西中学校区から丸山祐香教諭(上野小)、中里中学校区から八重沢央校長(中里中)、ふれあいの丘支援学校から石塚有希教諭が委員として新たに加わりました。

この推進協議会の所轄事項は、小中一貫教育に関する課題を摘出し、改善に向けて十日町市教育委員会に提案することです。十日町市では、令和8年度を初年度とする第三次総合計画を策定中で、その基本構想が発表されました。総合計画を受けて教育大綱や学校教育の重点が策定されます。それらを上位計画として、小中一貫教育基本計画を作りますが、そこで目指す子ども像についての提言をいただくことが今回の協議会での所轄事項となります。



協議会では、3つのグループに分かれ、小中一貫教育で目指す子ども像について熱心な話し合っていました。協議を進めていただくうえで念頭に入れていただいたことは、十日町市総合計画基本計画の基本方針1『人にやさしいまちづくり』に示された(2)『ふるさとを愛し自立して社会で生きるこどもを育てるまち』を具体化するこども像についてです。

グループごとに熱心な討議が行われまし

た。小中一貫教育基本計画改定において目指す子ども像の方向性についてまとめてみると次のようになるのではないかと思います。

2つのキーワード（「ふるさとを愛し」「自立して社会で生きる」）から4つの子ども像を選び、それを支える非認知能力を抽出してみました。

◆キーワード1（ふるさとを愛し）から

- 1「地域が好き 地域に貢献したい 地域が心の土台 学んだことを地域で生かす」  
地域愛

◆キーワード2（自立して社会で生きる）から

- 2「進んで挑戦（チャレンジ）し、失敗を生かして次に進める」主体性
- 3「様々な課題に対し、自分で考えて解決しようとする」課題解決力
- 4「多様性を認め、豊かな関わりを築いていく」共生の理念を具現する力

4つの子ども像を支える非認知能力を抽出すると・・・

- 1「地域が好き 地域に貢献したい 地域が心の土台 学んだことを地域で生かす」  
地域愛

- ふるさとのよさを感じ取れる
- ふるさとに好きなものがある
- 地域に積極的にかかわろうとする
- 地域のために働くうれしさを感じることができ  
そのために小中一貫教育では何をすべきか（委員からの意見）
  - ・その地域ならではの教育資源（博物館やキョロロも含め）を活用する
  - ・地域の「人・もの・こと」を教材化して探究的な学びを進める
  - ・社会教育との連携を進めかかわる大人を増やす
  - ・9年間一貫して地域と関わる活動を推進する

- 2「進んで挑戦（チャレンジ）し、失敗を生かして次に進める子」主体性

- 自己肯定感・自己有用感をもつ
- 自分の成長を実感できる
- 好きなことを楽しむことができる
- 目標をもち努力し続けることができる
- 自分をコントロールする（がまん・高みに向かう）ことができる  
そのために小中一貫教育で何をすべきか
  - ・従来の行事（運動会・学習発表会など）を子どもが考え計画に参加する
  - ・才能ではなく努力をほめる教育を学校・家庭で連携して取り組む

- 3「様々な課題に対し、自分で考えて解決しようとする子」課題解決力

- やりぬく粘り強さをもつ
- 自己理解ができる
- 困ったときに助けを求められる
- 疑問をそのままにせず解決しようとする
- 解決の見通しをもつことができる
- 楽しみながら学びに向かう  
そのために小中一貫教育では何をすべきか
  - ・定着すべき学力を身に付けられるようにする
  - ・安心して学べる環境をつくる

- 4「多様性を認め、豊かな関わりを築いていく子」共生の理念を具現する力



- 他者への配慮や、やさしさをもつ
- 違いを認めつつ多様な他者と協働できる
- 自分も相手も大切にできる
- 人の気持ちや痛みが分かる想像性を働かせる
- 力を合わせて関わる楽しさがわかる

そのために小中一貫教育では何をすべきか

- ・人と関わることによって解決する経験を積む
- ・読書の習慣を身に付けるようにする
- ・異年齢集団で活動する経験を積み重ねる
- ・小小・小中・特別支援学校との交流の充実
- ・小中一貫教育の出口に向けた中中交流の実施

いただいた提言をもとに教育委員会内で協議をし、小中一貫教育の改善に役立ててまいります。

## 学習指導班より

### ICTを活用した授業公開 小中の実践より

ICTを有効に活用した「主体的・対話的で深い学び」のある授業を構想し、6月より授業公開を実施してきました。小学校の理科、中学校の数学の授業実践について紹介します。



東小学校 遠藤先生の実践

小6 「電気と私たちの生活」  
～MESHを活用したインターフォンづくり～

- ・「具体物を実際に操作できるプログラミング教育に挑戦したい」という思いを、MESHを有効に活用することで実現していました。
- ・子どもたちは、班で真剣に話し合い、トライアンドエラーを繰り返していました。イメージしたインターフォンができた時は、満面の笑みがあふれていました。



松代中学校 中村先生の実践

中3 「関数」  
～GeoGebraを活用した2次関数～

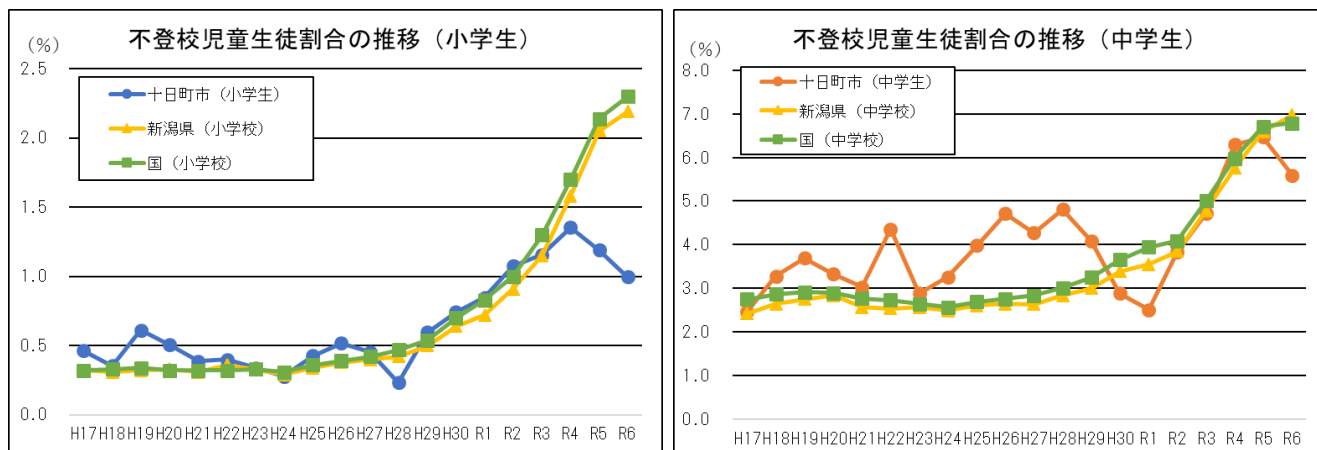
- ・「GeoGebra」を効果的に使い、さまざまなグラフを作成していました。アナログだと時間がかかるグラフを、数値を入力するだけで簡単に作成できるため、授業で有効に活用できます。
- ・ロイロノートのシンキングツールを効果的に使っていました。二次関数の特徴など、学んだことを整理していました。

## 教育相談班より

### 令和6年度不登校・いじめ認知の状況(国・県との比較から)

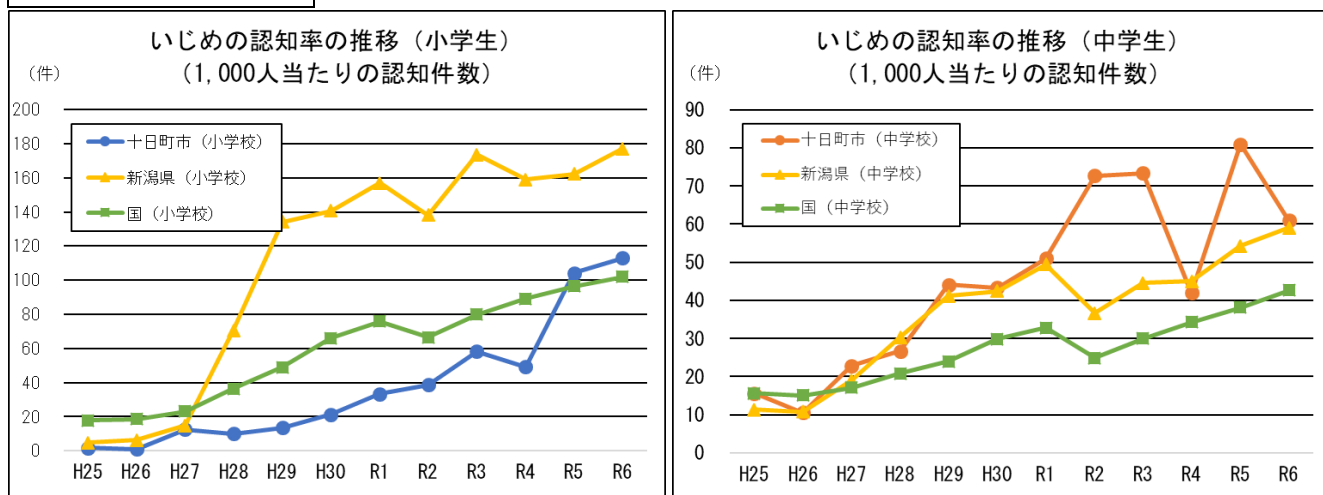
10月29日、文部科学省より「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果が公表され、国や県の状況が明らかになりました。

#### 不登校の状況



不登校児童生徒の割合は、国・県ともに増加傾向となりました。十日町市については、小学生・中学生ともに、減少しました。これは、各校における不登校対策（WEB－ＱＵを活用した「居心地のよい学級づくり」の浸透、校内教育支援センターにおける児童生徒一人ひとりの実態や特性に応じたきめ細やかな対応 など）が実を結んできた成果ではないかと思えます。

#### いじめの認知状況



1,000人当たりのいじめ認知件数では、小学校・中学校ともに県は国に比べ認知率が高くなっています。十日町市は、小学生では国を上回り、中学生では県とほぼ同様の認知率となりました。文部科学省は、「いじめの認知件数が多い学校について、『いじめを初期段階のものも含めて積極的に認知し、その解消に向けた取組のスタートラインに立っている』と極めて肯定的に評価」しています。一方、「いじめを認知していない学校にあっては、放置されたいじめが多数潜在する場合もあると懸念」しています。（文部科学省児童生徒課長通知より）

今後も、いじめ防止対策推進法を元にした「いじめ」の積極的な認知、チームとしての対応、認知後の見守り、3か月を目安とした解消の確認など、各校における取組を確実に進めていきたいと思います。

### 【表紙写真の説明】

10月10日（金）、まつのやま学園を会場に「第10回小中一貫教育小規模校全国サミット in まつのやま」が開催されました。開催テーマは「自然とつながる、地域とつながる、みんなとつながる まつのやま ～生き生きとした子が育つ9年間を通した営み～」です。オープニングでは、つくし会（児童生徒会）による活動が公開されました。1年生から9年生までの縦割り班で生き生きした活動が行われました。

公開授業では、1・2年生の生活科、3・4年生の外国語活動、5年生の理科、6年生・の算数、7年生の道徳を見せてもらいました。引き続き子どもサミットでは、オンラインで8・9年生が京都市の大原学院、滋賀県長浜市の余呉小中学校と「私たちの未来と地域の未来」をテーマとした話し合いを行いました。仲間や違う学校の子どもの声に耳を傾けて聞く態度や相手の話に正対して答える態度から日頃の教育活動の成果を感じることができました。

（以下写真はありますが、とても素晴らしかったので紹介します。）

午後は、開会行事で松之山学園の特色ある取組が紹介された後、シンポジウム「みんなで『ENJOY & CHALLENGE』をしよう！ ～地域＋自然＝学びのステージ～」が行われました。スピーチでは、まつのやま学園第1回卒業生の高橋千尋さんが、自身がこだわった行事ハートウォーミング集会・運動会・学園フェスタの思い出を語ってくれました。自分たちが考えて実行できる喜びや子どもがやりたいことをかなえてくれた先生方への感謝、目に見えない能力が育てられた学園生活のよさを生き生きと伝える姿が印象的でした。また、地域が学び舎であり、自分たちの学びに関わってくれる大人の姿がかっこよかった思い出と共に、全てがスリムになった社会で子どもが学べることが少なくなったのではないか、という心配を語ってくれました。

その後のパネルディスカッションでは、久保田智恵美初代学園長がコーディネーターをし、6人のパネリストによるまつのやま学園の魅力や強みが語られました。

最後に上越教育大学の清水雅之教授から「子どもたちは、学園や地域が大好きで、『好き』が大切な言葉である。子どもたちが好きになる学園・地域であるための『好き』をどうやって作っていくか、まつのやま学園から学ぶことがたくさんあった。」とまとめの指導をしていただきました。